

命の重さ

先日、STVの放送で、引退した盲導犬たちに最後まで付き添う人びとの活動の様子が映し出されました。ユーザーから盲導犬協会を通してパピーウォーカーのもとに引取られた盲導犬が、10年間も離れ離れになっていたのにその家族のことをちゃんと覚えていて、喜びを体全体で表す様子に、通い合う情の深さを感じます。

パピーウォーカーというのは、盲導犬候補の子犬を約10ヵ月間、家族の一員として迎え入れ、共に生活していくボランティアのことをいいます。子犬たちはパピーウォーカーと暮らす中で人間と生活する喜びを経験すると共に、社会や家庭の中で暮らすためのルールを学んでゆきます。やがて子犬たちは、専門的な訓練を経て、目の不自由な方の良きパートナーとして活躍することになります。

盲導犬の寿命は12、3年といわれていますので、一定の年齢になると、盲導犬としては働けなくなり引退することになります。引退後は、里親に引取られて余生を送ることになりますが、それまでの間、札幌市にある北海道盲導犬協会では「老犬ホーム」を開設し、そこで年老いた盲導犬の世話をしています。世話をするのは盲導犬協会の方を中心とするボランティアの皆さんですが、こうした多くの人々の無償の愛によって、盲導犬の活動が支えられているのだと改めて強く感じます。

人間を支えるために生きてきた盲導犬ですから、年老いて引退したら今度は人間が支え最後を見取る、というのは至極当然のこととと思っていましたが、先日、河崎秋子さんのエッセイ「ある羊飼いと彼の犬（1月11日付道新）」を読んで、いささかショックを受けました。

そのエッセイでは、河崎さんがニュージーランドにいた時のことが書かれています。

皆さんもご存じの通り、ニュージーランドといえば羊を思い浮かべるぐらい

沢山の羊が飼われています。その数は3千数百万頭とも言われており、どこの牧場でも良く訓練された牧羊犬が、羊の群れの誘導や見張りなどの作業に従事しています。勿論、どんなに元気な牧羊犬も、いずれ年老いて仕事ができなくなる日が来ます。その時は、先程の盲導犬のように他に引取られて幸せな老後を歩む牧羊犬もいるそうですが、少なくない数が主人によって処分（射殺）されているらしいのです。

人によっては、自分の犬に引導を渡すことが忍びなく知己の羊飼いに頼むこともあるとのことですが、その気持ちは良く分かります。

河崎さんがニュージーランドで羊飼いを習った農家の主人の場合は、自分で愛犬を銃で撃って殺したそうですが、彼女はエッセイの中で「普段は気さくな彼が、急に年齢以上に影を負った老人のように見えた」と書いています。

引退した牧羊犬を長期間飼養することが農家にとって大きな負担であるとしても、人間と行動を共にしてきた愛犬を、働けなくなったからといって殺すという感覚は正直理解しかねます。ただ、彼らを単純に野蛮だと非難することは避けるべきでしょう。河崎さんもいうように「畜産という産業を数千年続けてきた彼らには彼らなりの道理や条理がある。牧羊犬の件に限らず、彼らの農業に関するあらゆる考えはことごとく先鋭化され、その徹底した合理主義こそが、国民数が北海道の総人口にも満たない、欧州から遠く離れたこの島国の国際競争力を高域に押し上げている」ということもまた現実だと思うからです。

愛犬に銃を向ける牧場主の心中を推し測ることはできませんが、現象面だけを見て議論することの危うさを垣間見る思いです。

一方、日本では、ペットを虐待して殺してしまったり、育てるのが面倒になって捨ててしまうという、飼い主のモラルの欠如が大きな社会問題となっています。牧羊犬の悲劇をあげつらう前に、こうした飼い主達の無責任こそ、もっと厳しく問われるべきでしょう。（塾頭 吉田 洋一）